

Troilus and Cressida における 「解釈学的コード」と「象徴のコード」について

中 村 裕 英

1

Troilus and Cressida に顕著に見られる知的な議論は、グローブ座の観客よりは Inns of Court の法学生のために書かれたものと言ったのは Peter Alexander だが、¹⁾ その後もこの難解な劇については様々なことが言われてきた。O. J. Campbell は、登場人物のほとんどが貶めて描き出されていることから、この劇は1599年に施行された satire と epigram に対する禁止令によって登場した “comical satire” であると考えた。²⁾ W. W. Lawrence は “problem play” の一般的特徴を

The essential characteristic of a problem play, I take it, is that a perplexing and distressing complication in human life is presented in a spirit of high seriousness.³⁾

と指摘し、“problem play” という用語の不十分さ故に、*Hamlet*, *All's Well that Ends Well*, *Measure for Measure*, *Troilus and Cressida* を “problem comedies” として分類した。E. M. W. Tillyard は Lawrence の考え方に基本的に従いながら、*Shakespeare's Problem Plays* では、この劇の問題劇たる所以を “multiplication of planes of reality” がまさに劇の内的調和を破壊しかねない点にあると指摘している。⁴⁾

上述の代表的批評ではこの劇の基本的特徴 — 1) 他の劇に類を見ないほどの知的な議論が多い、2) それらの議論は対立する意見を衝突させただけで、結論にまで止揚されていない、3) Hector や Troilus などの登場人物の性格

描写に一貫性が欠けている — が指摘されているが、*Troilus and Cressida* に対するこのような批評のほかにも、この劇が観客に与える影響を論じた J. C. Oates の “The Ambiguity of *Troilus and Cressida*”⁵⁾ や Arnold Stein の “*Troilus and Cressida* : The Disjunctive Imagination”⁶⁾ などの注目すべき論文がある。上に述べたこの劇の特徴はこれらの論文でも指摘されており、Arnold Stein はそれらを、次のように表現している。

Disunity infects not only persons and society but themes and symbols, as if the dramatic imagination were trying to oppose itself at every turn;⁷⁾

ここに見られる “disunity” や、他の批評に見られる “ambiguity” や “discrepancy” という言葉は、この劇の問題劇としての性格を如実に表している。

それらの “disunity” や “discrepancy” という言葉で表されている *Troilus and Cressida* の性格は、観客でもあり批評家でもある者 (観客/批評家) にその “discrepancy” を埋める様々な解釈を生じさせ、時には、その “discrepancy” を解釈不可能なものとして受け取らせる結果となっている。しかし、*Troilus and Cressida* における “discrepancy” は決して解釈不可能なものではなく、逆に、劇中における様々なコードの interplay を分析した時には、この劇の最も基本的な特徴を明らかにしてくれるものだと言えるのである。そのような分析をするためには、我々 (観客/批評家) は、テキストによって継起された心的イメージを「地平」に思い浮かべることができる、W. Iser の提唱する「読者」と同じ立場に立つ必要がある。¹⁰⁾

本論では、このような “discrepancy” のひとつである、Helen に対する *Troilus* の評価の逆転に注目し、その背後にあるコードを分析することによって、この劇の「解釈学的コード」「象徴のコード」「文化的コード」を明らかにしていくつもりである。¹¹⁾ そのうえで、「解釈学的コード」と「象徴のコード」の関係を考え、最終的にこの劇の “discrepancy” によって示されている、*Troilus and Cressida* の最も基本的な特徴を述べてみたい。

2

まず最初に、Troilus が Helen に対する評価を逆転させる 2 幕 2 場を考察してみよう。Priam は Helen を引き渡せばこれまでギリシャ軍が被ってきた損害をすべて帳消しにするという Nestor の提案を会議にかけ、Hector の意見を求める。彼の返事は以下の通りである。

Though no man lesser fears the Greeks than I,
As far as toucheth my particular,
Yet, dread Priam,
There is no lady of more softer bowels,
More spongy to suck in the sense of fear,
More ready to cry out 'Who knows what follows?'
Than Hector is. The wound of peace is surety,
Surety secure; but modest doubt is call'd
The beacon of the wise, the tent that searches
To th'bottom of the worst. Let Helen go.
Since the first sword was drawn about this question
Every tithe soul 'mongst many thousand dismes
Hath been as dear as Helen — I mean, of ours.
If we have lost so many tenths of ours
To guard a thing not ours nor worth to us
(Had it our name) the value of one ten,
What merit's in that reason which denies
The yielding of her up? (II. ii. 8-25)₁₂₎

それに対する Troilus の反論はこうである。

Fie, fie, my brother:
Weigh you the worth and honour of a king
So great as our dread father's in a scale

Of common ounces? Will you with counters sum
 The past-proportion of his infinite,
 And buckle in a waist most fathomless
 With spans and inches so diminutive
 As fears and reasons? Fie for goldly shame! (II. ii. 25-32)

このような反論をする Troilus を、兄弟のなかで占いに通じている Helenus は、次のように批判する。

No marvel though you bite so sharp of reasons,
 You are so empty of them. Should not our father
 Bear the great sway of his affairs with reason
 Because your speech hath none that tell him so? (II. ii. 33-36)

こうして会議は、意見の一致が見られないまま、延々と続いていくが、最初に3人の科白をすべて引用したのは、ここに“worth”と“reason”についての対立する考え方が浮彫りにされているからである。Hector は、上の語り口から窺えるように、物事を慎重に考え、状況を詳細に至るまで検討したうえで、物事の「価値」を決める人だといえる。従って、Hector は「理性」に信頼を置いている人物であることは疑いのないことであり、彼にとっての「価値」は「理性」に基づいたものである。

一方、Troilus は Hector に反論する時、故意に「理性」(“reason”) を「理由、口実」(“reasons”) に歪めているが、このことは、Troilus の「理性」に対する考え方を端的に劇化したものであると言ってよい。彼は Hector とは対照的に「理性」に全く重きをおいていず、考え方も極めて主観的な人物である。最初に引用した科白で Helen の価値を Priam に匹敵するものであり、“past-proportion” (immeasurable quantity: *Arden*) だと言っていることは、彼の主観的傾向を示す一例である。彼にとっては、「理性」は臆病者が使う口実としてしか考えられていないことは、この後の議論からも明らかである。

Nay, if we talk of reason,

Let's shut our gates and sleep: manhood and honour

Should have hare hearts, would they but fat their thoughts

With this cramm'd reason: reason and respect

Make livers pale, and lustihood deject. (II.ii.46-50)

それに対して、Helenus は占いに通じているにもかかわらず、Hector と同じように「理性」に信頼をおいている人物であると言ってよい。先に引用した科白では、彼は Troilus によって「理由、口実」に意味を歪曲された “reason” を Hector が使った意味に戻し、Troilus に「理性」が欠けていることを皮肉っているが、それは彼の理性的側面を示したものである。

つまり、2幕2場の冒頭では、Helen をギリシア軍に引き渡すかどうかについて、Helen の「価値」をめぐる理性的／主観的態度の対立が描き出されていると言えるが、そこで勝利を収めるのは「理性」の側ではない。Hector は Helen をトロイ軍に残すことの危険性を終始一貫して理性的に主張し、その議論の正当性は誰の目にも明らかであるにもかかわらず、最終的には Troilus の主張に同意してしまうからである。このいわば腰の砕けた Hector の姿勢はしばしば批評家の注目を引いているが、彼の腰砕けの理由についてはいまだに十分な説明がなされているとは筆者には思われない。というのは、Hector の行動の背後に働いている「文化的コード」に対して正当な評価がなされていないと考えるからである。Hector は最初から “Let Helen go.” とわずに、“Though....Yet....The wound...; but...” という回りくどい言い方で、Helen の問題を切りだしている。“Let Helen go.” 以下の発言を見る限り、Hector は結論を既に用意しており、しかもそれに対する明確な根拠も持っている。従って、我々は Hector がなぜそのような回りくどい言い方をしたのかという疑問を持たざるを得ない。その疑問は Hector がトロイ戦争の中止を提案することに対して「後ろめたさ」を持っているためだと考えることで一応解消されるが、しかし完全に解消されることはない。その後ろめたさを生じさせている、Hector の精神のなかの「文化的コード」まで明らかにしなければ、十分ではないからである。

Hector は Homer の *Iliad* に登場してくる神話的人物であるが、Shakespeare

が彼の精神を形成する上で主に利用したのは、G. Bullough などの研究からも窺えるように、G. Chaucer, W. Caxton, J. Lydgate であった¹³⁾。彼らの作品に描かれているトロイの兵士の像は、中世の文学でひとつの重要なモチーフである chivalry を強く反映しており、*Troilus and Cressida* の Hector にも、その影響が色濃く現れている。

中世の chivalric code は C. B. Watson によれば、以下の通りである。

Desire for honor and glory was an obsession of the feudal nobility....
On the other hand, the knight was, by definition, a warrior. When he engaged in battle he was apt to be just as thirsty for fame and glory and just as keenly sensitive to public reproach and shame as his Renaissance counterpart. Honor, glory, reputation, and renown were an integral part of the medieval chivalric code, as were also the martial and heroic virtues of prowess, ambition (desire for fame), fealty, oathkeeping, loyalty to one's military leader, and generosity (largess) on his part in the distribution of rewards to his valiant soldiers. Indeed, kinship and clan ties were so strong, and sensitivity to insult was so acute, that blood revenge, as well as trial by combat, was quite common in the Middle Ages;¹⁴⁾

このコードに照らして Hector の行動を考えると、彼が持って回った言い方をせざるを得なかった理由が、自ずから明らかになってくる。つまり、彼は “The beacon of the wise” (II. ii. 16) によって Helen をギリシア軍に引き渡すべきだと感じていながら、それをあからさまに主張すれば彼自身が臆病者という非難を受けかねないのである。それを恐れたが故に、Hector はあのような言い回しをした訳である。

Troilus の “Fie, fie...” という軽蔑的な反論は、果たせるかな、Hector が最も恐れていた点に向けられている。Troilus はこの劇では chivalric code をほぼ完全に具現した兵士として登場しており、そのような人物が Hector の持って回った言い方に “fears” を感じ取ることは十分に納得のいくことであ

る。Troilusの主張はこれ以後も chivalric codeに従って展開されるため、トロイの戦士たちの chivalryの世界では、アプリオリに価値あるものとして受け取られることになる。しかし、ここで注意すべきことは、Troilusの chivalric codeに従った主張が、劇全体の枠組みのなかではかならずしも肯定されていないということである。Shakespeareはトロイの世界を chivalric codeに応じて描きだしているが、それはミメシスの原則にも叶ったものとして評価できる。しかし、同時に彼はトロイ軍の悲劇的結末がそのコードによって引き起こされたことに対して盲目になっていない。このことは、劇中のHelenusとCassandraの扱いかたから窺える。

Helenusは2幕2場の会議において、Troilusの反理性的主張を皮肉っていたが、それは彼が伝統的に予言者としてソースの上でそういう人物として登場しているためだけではない。彼が予言者として chivalryの世界の周辺に位置し、それだけ、その世界の中心にいる chivalric codeを具現したTroilusに対して、その極端な主観的傾向のもつ危険性を感じているからである。Cassandraも予言者で、しかも狂人として、chivalryの世界の周辺におり、Helenusと同様にTroilusのHelen擁護の主張の背後に潜む危険性に直感的に気付いている。その危険性とはトロイ軍の敗北であるが、ShakespeareはCaxtonでは会議が終わって予言するCassandraをあえてこの会議の最中に“Cry, Trojans, cry!” (98)と叫ばせて、その敗北を観客に暗示しようとしている。筆者にはこのような変更の背後に、Shakespeareの批判的態度が表れているように思われてならない。その批判とは chivalric codeの盲目的な信奉に伴う判断力の欠如ないしは低下であり、そうした傾向をTroilusだけでなくHectorにもShakespeareは描きだそうとしている。その結果が、会議の最後に見られたHectorの突然の腰の砕けた態度であり、それは、彼の判断力が chivalric codeを常に引用するTroilusによって鈍らされたことを示しているのである。

これまで見てきたことから理解されるように、トロイ軍の会議でHectorがHelenをギリシア軍に引き渡さないことによって戦争を続行する背後には、chivalric codeという「文化的コード」が強く働いていたと言えるが、しかしこの会議

で働いている文化的コードはそれだけではない。表面に現れないだけにこの場の Troilus とほとんど関係付けて論じられることのないコードであるが、筆者にはこの場においてこそ論じられるべきコードが一つあるように思える。それは courtly love のコードであり、このコードがこの場の Troilus に大きく作用し、結果的に Hector にも影響を与えることになっているからである。

Troilus は Helen を擁護する時に、彼女の価値が通常の尺度では測ることのできないものであると、何度も述べている。しかし、その「価値」を何が決定するかについては、かなり曖昧な意見しか持っていない。彼は「価値」を決めるものは個人の主観である(“What's aught but as 'tis valued” : II.ii.53) と言うかと思えば、逆に Helen にアプリアリに「価値」が存在しているかのような言い方をする。(“Why, she is a pearl...” : 82ff. “She is a theme of honour and renown,…” : 200ff.) どちらが彼の本質をなす意見かは容易に決められないが、この場の彼に一貫して見られる姿勢が主観的なものだということは疑い余地のないことである。このことは、以下の科白からも窺えるように、彼の議論の立て方が「私」(“I”)を基本としたものであることから明らかである。

I take today a wife, and my election
Is led on in the conduct of my will:
My will enkindled by mine eyes and ears,
Two traded pilots 'twixt the dangerous shores
Of will and judgement — (II. ii. 62-66)

この Troilus の “I” は、既に見てきたように chivalric code に従って行動しているが、しかしそのコードだけに従っているのではない。彼は Cressida への激しい恋心を劇の冒頭で明らかにしているが、そこで彼の態度は courtly love のコードに従ったものである。このコードに関しては W. G. Dodd が Andreas Capellanus の *De Arte Honeste Amandi* のなかの細々とした規則を簡潔に4つの規則に要約しているので、それを引用させてもらうことにする。

1. Courtly love is sensual.

2. Courtly love is illicit and, for the most part, adulterous.
3. A love, sensual and illicit, must needs be secret.
4. Love, to meet the requirements of the courtly system, must not be too easily obtained.¹⁵⁾

Chaucer の *Troilus and Criseyde* ではこの4つのコードはすべて完全に描き込まれているが、Shakespeare の *Troilus and Cressida* では Cressida が未婚に設定されているため、2番目のコードは当てはまらない。従って、Shakespeare の *Troilus and Cressida* における恋愛の背後に働いているコードを正しく記述しようとするれば、上の4つのコードは微妙な点で修正される必要がある。しかし、本論ではその修正を試みるのが目的ではなく、Troilus の行動に見られる courtly lover としての傾向がトロイ戦争に与えている皮肉な結末を見ていこうとするものである。

Troilus の Cressida への愛が最初「官能的」であること、また、彼が2人の関係を肉親には「秘密」にしていること、さらには、Pandarus を介しなければ恋は「容易に成就しない」ことなどには、上記の courtly love のコードが基本的に反映されていると考えられる。そのなかでも、いま問題にしている会議の場での Troilus に関して注目すべきことは、Troilus が Cressida への愛を肉親に「秘密」にしていることである。これは上記の3番目のコードの変形と言えるものだが、その変形された courtly love のコードによって支配されている Troilus が、会議の場において Hector の理性的考え方を歪めてしまい、結局 Hector に、トロイ軍が敗北することになるトロイ戦争を続けさせたのである。これは、courtly love に対する Shakespeare の皮肉な扱いかたと言えるものであるが、従来あまり問題にされていなかったことなので、以下ですこし詳しく見ていくことにする。

まず、劇の冒頭における Troilus の姿を見てみよう。

Troil. At Priam's royal table do I sit,
And when fair Cressid comes into my thoughts —
So, traitor! 'When she comes'! When is she thence?

Pand. Well, she looked yesternight fairer than ever I
saw her look, or any woman else.

Troil. I was about to tell thee: when my heart,
As wedged with a sigh, would rive in twain,
Lest Hector or my father should perceive me
I have, as when the sun doth light a storm,
Buried this sigh in wrinkle of a smile;
But sorrow that is couch'd in seeming gladness
Is like that mirth fate turns to sudden sadness. (I. i. 29-40)

上の科白には、Cressida を恋していることを、Troilus が恋の取り持ち役である Pandarus 以外の誰にも打ち明けておらず、時折襲ってくる激しい恋心を肉親にさえひたすら押し隠している姿が描かれている。このような Troilus の姿は、取りも直さず、先に引用した courtly love の 3 番目のコード (実際はそれの変形コード) に従って彼が自分の恋を「秘密」にしているためにはかならない。

このような Troilus が冒頭の間では Helen に対し、次のように言っていた。

Peace, you ungracious clamours! Peace, rude sounds!
Fools on both sides, Helen must needs be fair
When with your blood you daily paint her thus.
I cannot fight upon this argument;
It is too starv'd a subject for my sword. (I. i. 89-93)

しかし 2 幕 2 場の会議では、これとは全く逆の主張をしている。

She is a theme of honour and renown,
A spur to valiant and magnanimous deeds,
Whose present courage may beat down our foes,
And fame in time to come canonize us; (II. ii. 200-203)

ここでの "She" は Cressida ではなく Helen のことであるが、Troilus にとっては Cressida こそがここで述べている Helen のような女性であったのであって、Helen

はすぐ前の引用で見たように、“too starv'd a subject”であった訳である。しかし、彼はこの会議では Cressida のことはおくびにも出さない。もちろんそれは、Priam の司会する会議に Cressida のことが話題になっていないための当然の結末だ、と単純に考えることもできる。しかしここで我々は先に引用した彼と Pandarus との会話にもう一度注意を払う必要がある。そこには “At Priam's royal table” という言葉があり、2幕2場はまさにその “Priam's royal table” での会議なのである。これは単なる偶然ではない。

それは、Troilus が2幕2場の会議において冒頭で告白した Cressida への強烈な恋心を胸中で抱く可能性があることを暗示するものである。Troilus が果たして Cressida のことを実際に会議で思い出し、恋の苦しみに歪む顔を作り笑いで押し隠したかどうかは、完全に観客や読者の想像に任されている。筆者は2幕2場での “Priam's royal table” において Troilus が Cressida のことを思い出し、Helen を Cressida に見立てて議論を展開していると考える者であり、そう考える以外に、Troilus が以前 “too starv'd a subject for my sword” (I. i. 93) と言った Helen を、2幕2場で “a theme of honour and renown” と称賛し、熱心に弁護する内的必然性を思い当たらない。Troilus が “I take today a wife,” (II. ii. 62) と言う時、我々は Cressida のことを思い浮かべるが、このことは取りも直さず、彼が Helen を通して Cressida のことを考えていることを観客に示しているものと言えよう。

先に、我々は Troilus が終始 chivalric code を前面に押し出して、2幕2場の会議で雄弁を振るっていることを指摘したが、彼の Cressida への思いを考慮すると、それだけでは、ここでの Troilus の行動を十分説明したことにはならないであろう。それは以下のように補足される必要がある。Troilus は “Priam's royal table” で Cressida への恋心を強く感じているにもかかわらず、それを口外することは courtly love の「秘密にすべし」というコードによって禁じられている。それ故、chivalry の世界で尊重されている chivalric code に従って Helen を “a theme of honour and renown” と讃えることで、彼女を通して Cressida への恋心を吐露している。つまり、Helen という固有名詞は Troilus

にとって Cressida への思いを公的記号に変換する装置として働いていた、と
言い直すべきである。

Hector は、上のような錯綜した Troilus の内面は知る由もなく、ただ Troilus
が表面に装っている chivalric code に幻惑されて、結局トロイ軍が敗北する
ことになる戦争を継続してしまいうけである。以上のように、2幕2場のトロ
イ軍の会議では、chivalric code と courtly love という二つの文化的コード
の、R. Barthes 流に言えば「戯れ」が存在し、それがこの劇の面白さでもあ
り複雑さともなっているのである。

3

これまで二つの文化的コードが2幕2場の会議において働いている様を見て
きたが、それは、そこにトロイ戦争の勝敗の行方が暗示されているからである。
この劇を見る Shakespeare の時代の観客は、その戦争がギリシア軍の勝利に
終わることを知識として知っていたことは十分考えられるが、そのことがトロ
イ戦争の勝敗がいかなる原因で決定されたかを劇化するこの劇の力を、些かも
弱めることになっていない。むしろ逆に、劇中のあらゆる場面でその勝敗がど
のように決まっていたかをこの劇は出来る限り明確に分節化しようとしてい
る。従って、その問題を追及することで、この劇の核心に少しでも近づくこと
ができるのではないかと考えられる。この問題を追及していくことは、この劇
の「解釈学的コード」(“code herméneutique”)を探究していくことにはかな
らない。文学のテキストは、一般に、自己の生命を維持するため、解かれるべ
き謎を最後まであからさまには語ろうとはしないが、同様のことが *Troilus and
Cressida* という劇のテキストについても言える。ここでは、トロイ戦争の結末
が解かれるべき謎として解釈学的コードのなかに埋め込まれているのである。

ここで2幕2場での状況を記号論的に言い換えてみると、Troilus の主張は
会議という公的な場に相応しい chivalric code に従ってなされているながら、そ
こに彼の Cressida への私的感情が嵌入していた。しかも、その私的感情 ——

それは公的、国家的無私と対立する“will”（利己的意思、性的欲望、頑迷、放縦などの意味での）と言い換えてもよい——は、courtly loveのコードによって巧みに隠されており、結局、トロイ軍の“base and pillar” (IV. v. 211)であるHectorがそれを見抜けなかった。さらに言えば、国家的目的で開かれた会議の場で私的なものが公的なものを侵食し、会議の決定が“will”によって左右されたということになる。ここにこの劇における解釈学的コードの意味が暗示されている。その暗示とは、言うまでもなく、トロイ軍の敗北であり、このことが、2幕2場の会議において示されていたわけである。

*Troilus and Cressida*は、5幕での実際の戦争の場面に至るまで、トロイ軍とギリシャ軍が別々に並行して描かれているが、ギリシャ軍のほうはトロイ軍に比べてかなり詳しく描き込まれている。そこに我々は、トロイ軍の敗北とは対照的なギリシャ軍の勝利を読み取ることができる。まず最初に2幕3場を考察していくが、それはここに、ギリシャ軍の勝利についての解釈学的諸項が豊富に盛り込まれており、この場だけでも十分この劇の解釈学的コードの意味を探ることが可能であるからだ。

2幕3場で最初に登場してくるのはAjaxに殴られて腹を立てているThersitesであり、彼は腹立ちに紛れて次のような科白を吐く。

If Troy be not taken till these two [Ajax and Achilles] undermine it, the walls will stand till they fall of themselves. O thou great thunder-darter of Olympus, forget that thou art Jove the king of gods: and Mercury, lose all the serpentine craft of thy caduceus, if ye take not that little little less than little wit from them that they have; which short-armed ignorance itself knows is so abundant scarce, it will not in circumvention deliver a fly from a spider without drawing their massy iron and cutting the web. (II. iii. 8-18)

この言葉の「意味」は難解なので三つの段階に分けて述べてみると、まず、この科白はThersitesが言っているように“execrations” (II. iii. 7)であり

“prayers” (*ibid.* 22) でもあるので、その modality に込められた彼の「そうあってほしい」という願いを最初に意味として挙げるができる。次に、その願望の具体的内容を述べると、Ajax と Achilles は全くの愚か者なので、その愚かさを持ち続ける限り、トロイが減びることは決してない、ということになる。さらに、その科白をこの劇の一つの解釈学的コードとして捉えた時には、Ajax と Achilles の愚かさ (高慢、自己中心主義、“will”) をギリシャ軍がうまく制御し、利用できれば、トロイ戦争に勝利することができる、という意味をそこに読み取ることができる。この最後の意味は Thersites の科白に暗示されているにすぎないが、しかし、その暗示の意味は実際に 2 幕 3 場の展開によって実現されていくのである。

Thersites の独白の後、Agamemnon, Ulysses, Nestor, Diomedes, Ajax が何かの用件で Achilles に会いに来るが、その用件は劇中では最後まで明らかにはされない。しかし、彼らが本当に Achilles に対して用件をもっていかどうかは、極めて疑わしいことである。というのは、1 幕 3 場で既に Hector との一騎打ちには Ajax を差し向けようという合意が Agamemnon, Ulysses, Nestor の間で成立しており、もはや、Achilles と話し合うことは何もないからである。また、たとえ話し合ったとしても、高慢な Achilles からは何も得られないことを彼らは十分に承知している。では、一体どのような用件が彼らにあったのか。以下で展開される状況を考慮すると、彼らの本当の用件は Achilles にあったのではなく、Ajax にあったことが分かってくる。そして、その用件とは Ajax の高慢を挫くことであったのである。ここで、2 幕 3 場を少し具体的にみてみよう。

Agamemnon らは Achilles と話し合いたいと申し出るが、Achilles は会おうともしない。その間に、Agamemnon と Ajax は Achilles の高慢についてちょっとした会話をする。この時 Agamemnon は Ajax の “Why should a man be proud? How doth pride grow? I know not what pride is.” という疑問に次のように答える。

Your mind is the clearer, Ajax, and your virtues the fairer. He that

is proud eats up himself: pride is his own glass, his own trumpet,
his own chronicle; and whatever praises itself, but in the deed,
devours the deed in the praise. (II. iii. 155-59)

この後、Achilles に会いに行っていた Ulysses が戻ってくると、Agamemnon は今しがた Ajax に “pride” について説明したばかりであるにもかかわらず、Ulysses に Achilles がなぜ自分について直接会おうとしないのかを尋ねる。当然のごとく Ulysses の返事は Achilles の “pride” に関するものだ。

Things small as nothing, for request's sake only,
He makes important; possess'd he is with greatness,
And speaks not to himself but with a pride
That quarrels at self-breath.

.....
He is so plaguy proud that the death-tokens of it
Cry 'No recovery'. (II. iii. 170-79)

これは先に Agamemnon が言っていたことと表現の上では異なっているが、内容の点ではほとんど同じものである。二人とも “pride” が Achilles に及ぼしている嘆かわしい状況について述べているだけである。しかも、彼らは Achilles が高慢になっていることを十分承知しているにもかかわらず、それを話題にしている。しかも Ajax の前で。この不自然さが筆者をして、彼らが Achilles に会いに来た用件が Ajax にあったと推測させるのである。その不自然さを解消しようとするれば、彼らが Ajax に対して劇中劇を演じていると考える以外にない。Ajax は Achilles に影響され、彼と同じように高慢になり、既に彼らの手に負えなくなっていることが Nestor によって明らかにされていた。

Ajax is grown self-will'd, and bears his head
In such a rein, in full as proud a place
As broad Achilles; (I. iii. 188-90)

その Ajax の高慢さ、自己中心主義、放縦（これらはすべて “will” と同義である）を封じ込めようとして、彼らは Ajax を Achilles との会見に同行させ、

さらに、彼の目の前で Achilles の高慢さを非難するわけである。そうすることによって、Ajax に彼自身が「鏡」に写った姿といえる Achilles の高慢な姿を見せ、あなたはあのような高慢で愚かな人ではなく、立派な人物ですよ、と同意を求めることで、彼らにとって都合の良い「高ぶらない、立派な」Ajax に、高慢な Ajax を変えてしまおうとしている。

この彼らの芝居は完全に成功し、Ajax は自分を立派な人間だと信じ込み、Agamemnon らの言うことに唯々諾々とする柔順な人物になる。このことにより、彼らは Ajax の高慢を挫くことに成功し、彼を Hector との一騎打ちに駆り出す下準備を完了したことになる。我々が Thersites の科白を解釈学的コードとして捉えた時に見てきた、ギリシャ軍が勝利するための二つの条件のうちの一つが、こうして 2 幕 3 場の最後で達成されるわけである。

もう一つの条件である Achilles の参戦は、3 幕 3 場において彼の “pride” を傷つけることで準備される。この時も Ulysses, Agamemnon, Nestor たちは芝居をするが、今度はそこに Ajax まで加わっている。ここでの彼らの芝居は Achilles を無視して彼の前を通り過ぎることで、Achilles の数々の功績を忘れてしまった振りをするのである。彼らは Ajax には「立派な人間」というイメージを植え付けようとしていたが、Achilles には逆に「つまらない人間」というイメージを与えようとする。

Achilles は彼らの芝居を見て不安になり、無視される理由を Ulysses に尋ねる。Ulysses はこの機会を待っており、小道具として本まで用意している。そして、著者が功績は他人によって評価されなければならないも同然であり、また常に努力して功績を積み重ねなければ、時間が経つうちに忘れ去られていくものだと言っていると教える。ここで Ulysses が用いている懐柔の戦略は、「鏡」や “devourer” としての Time のイメージ、格言などの文化的コードを利用することである。ここでそれらについて詳しく述べる余裕はないので、結論だけいうとその Ulysses の戦略は Achilles に対してかなりの成功を収める。Achilles がこの場の終わりで珍しく大きな動揺を見せ、彼が参戦するのではないかと我々に感じさせるからである。

My mind is troubled, like a fountain stirr'd,
And I myself see not the bottom of it. (III. iii. 306-7)

しかし、Achilles が Ulysses の期待通りに “pride” を捨て、功績を積むためにトロイ軍と戦うかどうかは、まだはっきりとは分からない。従って、解釈学的コードで暗示されていた、ギリシャ軍の勝利のための第二の条件が完全に満たされるかどうかは不明だが、少なくとも、以下のことは言えると思う。

ギリシャ軍においては、Ulysses があらゆる手段を用いて、トロイ戦争に勝利するための二つの条件を満たそうとしている。ここでは、トロイ軍とは逆に “will” (利己的意思、放縦、性的欲望等) によって支配されてギリシャ軍の統一を乱している Ajax と Achilles は、Ulysses の巧みな戦略によって戦列に引き入れられようとしている。Ulysses は、Hector とは違い “will” に屈することなく、逆に “will” を公的な目的に従属させている。つまり、ギリシャ軍が描かれている 2 幕 3 場と 3 幕 3 場全体が *signifiant* となって示していることは、ギリシャ軍の勝利という *signifié* であると言うことができ、Thersites の科白に暗示されていた解釈学的コードは以上のようにしてより明確化されているのである。

4

Troilus and Cressida は、解釈学的コードによって示し続けてきたトロイ戦争の勝敗の行方を、5 幕に至って俄に不透明にしていく。Achilles は、トロイ人の恋人 Polyxena の母親から手紙を受け取り、再び “will” (性的欲望、利己的衝動) に支配されて戦うつもりはないと言うし、Ajax も Hector と対等に戦ったことで Achilles 以上に高慢になり、戦う気がなくなっている。さらに、実際の戦争の場面では、二人がいらないためにギリシャ軍の有力な兵士が次々に殺されている。では逆に、トロイ軍の勝利がそこで示されているかという、そういうことはなく、Hector の妻 Andromache は不吉な夢を見たと言って Hector

の出陣を引き止めようとするし、同様に Priam と Cassandra も Hector がその日に戦いに出ることを強く引き止める。ここでの Cassandra の最後の科白はトロイ軍の敗北を暗示して余りあるものだ。

Farewell — yet soft: Hector, I take my leave;

Thou dost thyself and all our Troy deceive. (V. iii. 89-90)

つまり、観客は5幕においてトロイ戦争の結末が果たしてどうなるかを明確に判断できない状況に置かれることになる。しかし、観客をそのような状況に陥らせることこそが、解釈学的コードのひとつの重要な使命なのである。というのは、解釈学的コードは物語の結末を暗示する解釈学的諸項を配置するが、同時に物語の命を長引かせるために（解かれるべき謎を読者が完全に知ってしまえば、もはや物語は読まれなくなり、それは物語の死を意味する）、結末をできるだけ隠しておこうとするからである。このような解釈学的コードの働きについて R. Barthes は S/Z で以下のように述べているが、同様のことは *Troilus and Cressida* における解釈学的コードについてもいえる。

文章が物語の《展開》を急がせ、この物語を導き、動かさざるを得ないのに対して、解釈学的コードは反作用を及ぼす。それはディスクールの流れに引延し（じゃま板、水止め、傾斜）を配置しなければならない。．．．このことから、解釈学的コードにおいては、その両端の項（質問と答え）に比較して、時間かせぎの形態素が豊富となるのである。すなわち、おとり（真実のながれを故意に妨げる傾斜の類）、両義性（真実とおとりの混合で、非常にしばしば謎の周囲を囲みながら、謎をいっそう深くする）、部分的解答（真実に対する期待を苛立たせるだけである）、中断された解答（真実暴露の失語症的停止）、塞きとめ（解決不能の証明）等である。¹⁶⁾

つまり、5幕における Achilles と Ajax の戦争不参加やギリシャ軍の劣勢は、Barthes の言う「引延ばし」にあたると思われる。

しかし、Barthes が分析している S/Z と我々が分析している *Troilus and Cressida*

との間には本質的な差異がある。それはジャンルの違いではない。小説と劇という様式の相違は、ここで問題にしている解釈学的コードに関しては、問題にならない。むしろ、二つの作品における解釈学的コードと象徴のコードの働きに関しての差異である。S/Z では、ザンピネッラが去勢歌手であるという謎が解釈学的構造のなかに埋め込まれており、そのコードを探究することが、すなわち、作品そのものが象徴のコードのなかに描き込んでいる去勢作用の探究となっていた。S/Z における去勢作用とは、ザンピネッラの秘密（彼女が去勢歌手であること）をサラジヌが知ることで、彼が殺される（彼の生命力そのものが去勢される）ことや、「私」からサラジヌの物語を聞いたロシュフィド夫人が、その話を聞き終えるや「永久に人生の恋愛が嫌」になってしまう（去勢作用に感染する）ことである。このような去勢作用の感染が S/Z では、象徴のコードのなかに埋め込まれていた。

しかし、*Troilus and Cressida* においては、解釈学的コードと象徴のコードとは同一の問題を扱っていない。この劇における解釈学的コードはトロイ戦争の勝敗を扱っているが、象徴のコードはその戦争のなかで“will”によって支配され、次第に自己の属している集団から精神的に孤立していく人間の姿を扱っているからである。このように、二つのコードが別々の問題を取り扱っているが故に、この劇ではしばしば“disunity”や“discrepancy”が問題にされるのである。

最後に、この劇の象徴のコードがどのような劇的表現になっているかを見て、本論を終わることにしよう。ギリシャ軍において Achilles や Ajax が“will” (wilfulness) に支配されて勝手な行動をしていることは既に指摘したが、そのような傾向は彼らだけに見られることではない。同様なことが Diomedes についても言えるわけで、彼が Cressida との逢い引きを重ねているばかりか、実際の戦争でも Cressida の気を引くことしか考えていないことは、彼もまた“will” (sexual desire) に支配されているからにはかならない。またそういう傾向はトロイ軍の兵士にも共通して見られるものである。たとえば、これまで chivalric code に従って“honour”や“glory”を尊重してきた Hector が黄金の鎧を手に入

れるために一人の兵士に襲いかかることは、彼もまた“will” (self-will) によって支配された行動をしていることを示している。さらに、これまで courtly love のコードに密かに従い、公には chivalric code に従って行動してきた Troilus が Cressida の不実な振舞いを目撃し、そのことで Diomedes への復讐心のみによって戦争に参加していることは、彼もまた“will” (self-will) の虜になっているといえよう。

5 幕の混乱した状況は、まさに“will” (これまで挙げてきたすべての意味をコノテーションとして持った“will”) が、登場人物の精神のなかで他のあらゆるものを押しつけて放恣な活動をしているためにはかならない。このような状況の象徴的表現を我々は次の Thersites の科白に見て取ることができる。

Letchery, lechery, still wars and lechery! Nothing else holds fashion.

A burning devil take them! (V. ii. 193-95)

“will” によって支配された人間はもはやどのような文化的コードにも従うことはない。Hector や Troilus にとっては、chivalric code や courtly love のコードはもはや何の意味も持たず、また、Achilles や Ajax にとっても、Ulysses が教え込もうとした Time や「名声」などの文化的コードの諸項は無意味なものになっている。Troilus and Cressida の 5 幕での混乱は、まさにこのような意味での混乱であり、それがこの劇の象徴のコードにある象徴的「意味」なのである。

Notes

1. Peter Alexander, "Troilus and Cressida, 1609," *The Library*, IX(1929), pp.267-86.
2. Oscar J. Campbell, *Comicall Satyre and Shakespeare's "Troilus and Cressida"* (San Marino, California: Adcraft, 1938).
3. William W. Lawrence, *Shakespeare's Problem Comedies* (1931; 2nd ed. New York: Frederic Ungar Publishing Co. 1960), p.4.
4. E. M. W. Tillyard, *Shakespeare's Problem Plays* (1950; rpt. Penguin Books, 1970), p.79.

5. J. C. Oates, "The Ambiguity of *Troilus and Cressida*," *Shakespeare Quarterly*, 17(1966).
 6. Arnold Stein, "*Troilus and Cressida*: The Disjunctive Imagination," *A Journal of English Literary History*, 36(1969).
 7. Arnold Stein, p.164.
 8. J. C. Oates, p.150.
 9. David Kaula, "Will and Reason in *Troilus and Cressida*," *SQ*, 12(1961), p.276.
 10. Wolfgang Iser, *Der Akt Des Lesens: Theorie ässthetischer Wirkung* (『行為としての読書』) 榎田収訳 (東京: 岩波現代選書、1982) による。
 11. Roland Barthes, *S/Z: essai* (『S/Z: バルザック「サラジューヌ」の構造分析』) 沢崎浩平 訳、(東京: みすず書房、1973, rpt.1981). 「文化的コード」 "codes culturels"、 「解釈学的コード」 "code herméneutique"、 「象徴のコード」 "champ symbolique" の概念は本書による。
 12. 以下、作品の引用は *Troilus and Cressida: The Arden Shakespeare*, Kenneth Palmer ed. (London: Methuen, 1982) による。
 13. Geoffrey Bullough ed., *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. VI (1966; rpt.1977, London: Routledge and Kegan Paul).
 14. Curtis Brown Watson, *Shakespeare and the Renaissance Concept of Honor* (Princeton, New Jersey: Princeton UP, 1960), p.38.
 15. William George Dodd, *Courtly Love in Chaucer and Gower* (Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1959), pp.5-8.
 16. R. Barthes (沢崎 訳)、pp.88-89.
- 付記: 本論文は第8回日本英文学会新人賞に応募したものを加筆、訂正したものである。

The Hermeneutic Code and the Symbolic Code of
Troilus and Cressida

Hirohide NAKAMURA

In the history of the criticism of *Troilus and Cressida*, the "disunity" of the play or "discrepancies" in the play have often been the center of discussion. In this paper, the present writer maintains that discrepancies in the play can be ascribed to the different functions played by the hermeneutic code and the symbolic code of the play. The two codes are defined in R. Barthes's *S/Z*, which shows that the enigma of Zambinella, a castrated singer, is encoded in the hermeneutic code, and the process of castration is encoded in the symbolic code. Thus the two codes deal with relatively the same subject in Balzac's *Sarrasine*. But in the present play, the outcome of Trojan War is encoded in the hermeneutic code of the play, whereas the symbolic code encodes the destructive working of the "will" (meaning sexual desire, selfishness, wilfulness, and so on) among almost all the characters. The hermeneutic code alludes to the defeat of the Trojans, particularly in II. ii, where Hector is not able to repress the desire of Troilus to continue the

war and decides on the continuance of the war, which results in the defeat of the Trojans. The code also alludes to the victory of the Greeks in their successful suppression of the wilful behaviour of Ajax and Achilles for the sake of a public end, viz. victory. But in the fifth act the audience is almost unable to conjecture the outcome of the war because in that act they see nothing but the disorderly behaviour of people of the both camps. This fact often causes critical embarrassment and is cited as a problematic aspect of the play. The present writer maintains that the fifth act represents the working of the "will" on almost all the characters, which is encoded in the symbolic code. The discrepancies in the play are, thus, ascribed to different functions of the two codes working in the play.